

タスカーーサで青少年交流の補助を行いました 高校生派遣プログラムの大きな意義を知る

宮武祐見（元国際交流基金日米草の根交流コーディネーター）

私は、2013年から2015年までの2年間、アラバマ州タスカーーサ市にあるアラバマ大学とタスカーーサ国際姉妹都市協会で、日米草の根コーディネーターとして勤務していました。その活動の中で、2015年にタスカーーサ市と習志野市の高校生が相互にそれぞれの地を訪れた際、活動の補助をしました。

渡日前のタスカーーサ市の高校生に対し、2ヶ月間毎週日本についての勉強クラスを担当。日本語会話の練習、文化の紹介、料理、生徒による日本についての発表等を行いました。海外に出るのが初めて、アラバマを出るのが初めて、という生徒が多くいるということから、不安と緊張と楽しみな気持ちと様々な思いを抱える人が多かったのが印象に残っています。生徒たちは帰国後、「食べ物が美味しかった」「着物を着られて嬉しかった」「学校が盛大に迎えてくれて嬉しかった」と満面の笑みで楽しかった様子を伝えてくれました。

習志野市から日本人高校生が来た際、自分たちと同じもしくはそれ以上楽しませたいと

いう思いで接しているタスカーーサ市内の高校生やホームステイ先の方々を目にした時は、日米の絆が深まったような思いで胸が熱くなりました。そして、「将来またアメリカに来ます！大学に入ったら留学したい！」と最後に教えてくれた何人かの習志野市の高校生と接した時、高校生という夢が広がる時期で派遣プログラムを実施する意義の大きさに改めて気づかされました。

タスカーーサ市と習志野市の高校生たちにも話をしたのですが、私たちは一歩国を離れると、その瞬間その国の「代表」になります。海外にいと自分が「日本人（アメリカ人）」だということを自国にいる時以上に意識します。今まで考えなかったことや当たり前だと思っていたことに対して「日本（アメリカ）はこういう時どうするの？」と質問を受けます。国際交流というと「海外で外国人と関わる」ということが頭に浮かびがちですが、自国のことをよく知り、それを説明できるようにする、というのも大事なのだと思います。



楽しさ一杯、日米高校生のランチタイム



日本について勉強中のタスカーーサ高校生